

受付番号

留学・研究計画書

氏名 平田 生子	留学機関名 インドネシア大学
留学先国名 インドネシア	留学期間 西暦 2011年9月～2013年8月
研究テーマ ジャカルタ首都圏におけるバタック人を取りまく多民族状況	
研究テーマの説明 (テーマの学術的・社会的意義についても記載してください)	
<p>本研究の目的は、インドネシアのジャカルタ首都圏に居住するバタック人たちの生きる多民族状況を、フィールド調査にもとづき、具体的、実証的に記述、分析することにある。</p> <p>バタック人はスマトラ島北部を故地とする民族である。ムスリムがマジョリティをしめるインドネシアにおいて、バタック人の大半がキリスト教を信仰している。また、人類学的にはマルガとよばれる父系氏族を相互に関係づける母方交叉イトコ婚（非対称縁組）が有名である。</p> <p>先行研究では、バタックの慣習法（アダット）に大きな関心がむけられ、バタック社会が父系氏族と非対称縁組から構成されているかのように論じられてきた。また、バタック人の都市移住に関する研究においても、こうした慣習法や社会組織の持続性に焦点があてられてきた。それゆえ、先行研究では、バタック人が他民族との間に形成する関係やネットワークをふくむ、社会生活の豊かな広がりや等閑視されてきた。だが、実際には学校、職場、教会、近隣社会における他民族との交流は頻繁におこなわれている。ジャカルタにおいてバタック人は多様な人々との関係を形成しながら生活しており、バタック人としての民族アイデンティティが日常生活のなかで大きな役割をはたしているとは考えにくい。</p> <p>現在執筆中の博士予備論文では、長期調査の準備として、ジャカルタに居住するバタック人の形成する社会組織やネットワークの実態を把握することを目的とした。大規模なバタック人居住区のあるチリリタン地区で頼母子講、親睦・同郷会、教会の活動内容を調査した。並行して、大規模な氏族組織や非対称縁組が演出される婚姻儀礼についても詳細な資料の蓄積をはかった。その結果、①数千人が集結する大規模な集まりでは、父系理念や民族アイデンティティが強調されるが、そこでの相互交渉は様式化されており、まさに儀礼的であること、②他方、日常生活では、小規模で地域限定的だが、親密な関係を構築していること、③日常的に交流しあうバタック人は、近隣社会に居住する人々であり、他地区のバタック人との交流は盛んではない、ゆえに、バタック人としての民族アイデンティティを強調する議論には問題があることなどを明らかにした。</p> <p>今後は調査地域と参与観察の幅を拡大し、バタック人のネットワークや社会組織を包括的かつ体系的に描き出す。同時に、バタック人の社会生活のなかでそれらの果たす役割がいかに部分的であるかを明らかにしたい。さらに、組織内の権力構造を政治的・経済的視点から解明する。</p> <p>本研究は、特定のネットワークのみに着目し、社会の全体像を包括的に理解せず、多様なネットワークを一枚岩的に論じてきたエスニシティ研究を考え直す一助となる。さらにクリスチャンであるバタック人とムスリムの共存関係の解明は、イスラーム社会のインドネシアで、かれらが果たす機能について考える足がかりとなるだろう。ひいては、グローバル化のすすむ地球社会全体の民族・宗教集団間におこるさまざまな現象に、的確に対応する知見を提供できる。</p>	

成果報告書

記入日 平成 25 年 3 月 13 日

氏名 平田 生子	留学先国名 インドネシア共和国	所属機関 インドネシア大学
研究テーマ：ジャカルタ首都圏におけるバタック人を取りまく多民族状況		
留学期間：平成 23 年 7 月～平成 24 年 12 月		
<p>本研究では、インドネシアの・ジャカルタ首都圏に居住するバタック人に焦点をあて、かれらの生きる多民族状況を明らかにする。なぜ、バタック人集住地区が形成されたのか、また、さまざまな民族が混在する現代のジャカルタの日常生活において、どのような場面で民族性が重要視されるのかを明らかにするため、フィールド調査と参与観察をおこなった。本報告書では主に、調査より明らかになった対象地区形成史と関連する民族境界線について記述する。</p> <p>調査地概要：</p> <p>ジャカルタは、人口約 1,000 万人を擁するインドネシアの首都にして最大の都市である。ジャカルタに居住する民族は多様で、そのうちバタック人は全体の約 4%をしめる。調査対象地区は、ジャカルタに 5、6 ヶ所あるバタック人集住地区の 1 つである東ジャカルタ市の C 地区である。C 地区は 124 の隣組 (RT: <i>rukun tetangga</i>) と、いくつかの隣組から成る 16 の町内会 (RW: <i>rukun warga</i>) から構成されており、総面積は 176 ヘクタール、総人口は約 4 万 5,000 人である。C 地区に居住する住民を宗教別に区分すると、イスラームが 80%と大半をしめ、プロテスタント 8%、カトリック 7%、ヒンドゥー 3%、仏教 2%とつづく。インドネシアにおけるバタック人の大半はプロテスタントを信仰している。</p> <p>今回調査をおこなった C 地区には、C 地区人口の 10%をしめる約 4,500 人のバタック人が居住しているが、その 9 割以上が 16 ある町内会の 1 つ、町内会 008 に集住している。面積 4 ヘクタールに約 300 世帯がある町内会 008 だが、人口の約 97%がバタック人であり、400 ヘクタールの土地に教会が 11 あるため、C 地区はバタック人集住地区としてジャカルタにおいて有名である。本調査はこの町内会 008 を中心におこなわれた。住み込み調査をおこなったのは、町内会 008 に居住する世帯 X と、町内会 008 周辺の多民族が居住する地区に居住する 2 世帯 (Y、Z) の合計 3 世帯であり、いずれもバタック人家族を対象とした。</p> <p>C 地区形成史：</p> <p>ジャカルタ中心部より 20 キロメートルの距離に位置する C 地区の土地の大半は元来、ジャカルタ土着の民族であるブタウィ人により所有されていた。1960 年代まで木々に覆われた森林が鬱蒼と広がり民家が数軒のみ点在する地区であり、ブタウィ人住民の多くはそこで果実を採集し生計をたてていた。1960 年代、政治的混乱により、経済的に困窮した多くの若者の就労目的による移住である都市移住が盛んになると、インドネシア全土からジャカルタへの移住者が大幅に増加した。バタック人は、C 地区にバス・ターミナルあつ</p>		

たことから、バスの運転手や車掌に従事するためにC地区に集まった。

ここの移住者はバタック人にかぎらず、多様な民族により構成されている。C地区内の町内会002の土地は、1960年代、政府が購入し、そこに清掃局が建てられ、さらに職員の住居のために土地が提供された。当時の清掃局長がスンダ人だったため、職員にも多くスンダ人が雇用され、スンダ人コミュニティが形成された。町内会010は1940年代にオランダ軍が所有する土地であり、1945年の独立後、インドネシア国軍(TNI: Tentara Nasional Indonesia)の所有地となった。町内会10には軍の寮(BS: Basis Siliwangi)があるため、多くの軍人、退役軍人、その家族が居住している。アスラマBSは、バンドゥンとジャカルタを往来するすべての軍人のためのベースキャンプがある場所である。1960年代、そこに駐在していた軍人の多くがマナド人やアンボン人であったため、現在マナド人とアンボン人のコミュニティがある。町内会007には、20年ほど前からアラブ人がシンセキを頼りに多く移住し、アラブ諸国への就労移住斡旋などに従事している。これら多様な民族の多くは個人や友人数名、核家族単位で移住をおこなっており、農村にみられるような親族関係の広がりは見られない。

町内会008のみにバタック人が集住し、400ヘクタールの土地に11もの教会が建設されている理由は、土地所有権と大きく関係する。町内会008の土地所有者は、現在までアチェ人の実業家であるKだという。しかし、1965年のスカルノ政権崩壊後、共産党員の疑いをかけられたKは行方知らずとなり、その後、この放置された土地にバタック人が移住し、集住地区が形成された。インドネシアでは、土地の権利証書、土地売買契約書、土地および建物税などが土地権に関わる。土地所有権は複雑で、土地権すべてが同一の者によって所有されているとは限らないため、土地所有問題はおざなりになったままである。実業家Kの親族が、この土地の所有権を主張したり土地を返却するよう求めたりしないのは、共産党員に対する抑圧の激しかった時代の名残で、差別されることを恐れているからだと言住民は話す。C地区も他の地区同様、土地の権利証書を所有する者は少ない。

さらに、バタック人集住には土地所有権に関連し、他の町内会の土地所有者によるクリスチャンであるバタック人への宗教差別があげられる。C地区ひいてはジャカルタの土地所有者の多くは、元来からジャカルタを故地とするブタウィ人である。ブタウィ人の大半はムスリムである。1960年代、インドネシア全土から訪れる流入者に土地や家を貸したり売却したりする際、キリスト教徒に対する宗教差別が頻繁にあった。入居希望者は、事前に宗教について問われ、クリスチャンは豚肉を食べるため、それを快く思わないムスリムが入居を断るケースがあった。また、バタック人に関していえば、バタック人は親族関係が強固であるため、頻繁に無尽講がひらかれる。大勢で集まり、賛美歌を歌い、豚肉料理を食べる人々を近所に置きたくないというムスリムが多いためである。以前に比べ、差別は減ったというが、いまだに入居時、宗教について問われる場合があるという。

上記の理由から、所有者が不明の町内会008にバタック人居住者が次々と流入し、住居をかまえ、それにともない、教会も1960年代から90年代にかけて次々と建設された。以前は、近隣世帯40世帯以上の署名があれば教会建設が可能であったが、1998年以降、町内会の9割の世帯の署名が必要になり、以前よりも教会建設が困難になった。そのため、オフィスビルのワンフロアを賃貸し、教会として使用する場合も多い。このように、歴史的背景から現在の民族による住み分けがおこなわれていることが明らかになり、それには、

宗教、土地所有権、職業などが密接に関係している。

民族境界線：

移住の歴史からある程度住み分けがおこなわれているC地区だが、現在日常生活において大きな民族対立が見られることはない。しかし、民族アイデンティティはしばしば食を境界として浮き彫りになる。住み込み調査をおこなった世帯Xの母親は、毎朝自宅のテラスで朝食を販売している。出勤や登校前の人々でにぎわうが、その大半はC地区に住むバタック人である。その理由として、彼女は、「ムスリムの人たちは、バタック人が調理したものに豚肉が入っていることを恐れて、食べにこない。豚肉は使っていないのにも関わらずだ」という。

一方で、民族・宗教を同じとする者との日常的な相互扶助は頻繁にみられる。以下は、バタック人集住地区に居住する世帯Xの近隣住民とのある1日のやり取りを記述したものである。

四女は、隣人T(30代女性)から早朝からオイの子守をするよう頼まれ、Tのためにお湯をX家からもってくるよう頼まれたりする。朝6時頃市場へ向かった次女は、鶏肉の値段が予想以上に高く、お金が足りなくなったので、偶然居合わせた顔なじみの女性(20代)に8,000ルピアを借りる。彼女はときどきX家へ朝食を買いに来るので、その時に母親にお金を返してもらおうよう頼む。

朝10時頃、向かいの家に住むH(30代男性)が紅茶に入れるお湯をもらいにきて、さらに裏に住むM(30代女性)がショウガを分けてほしいと頼みにきた。昼時、料理をしていた次女はスープに入れるネギがないことに気づき、はす向かいのI(50代女性)に長ネギをわけてもらいにI宅を訪ねる。

このような食料の分け合いは頻繁にみられ、高価でなければ、無料で分け合っている。たとえば最近価格が高騰したトマトを、Hの母親がX家から分けてもらうよう頼んだ際は、翌日市場でトマトを購入し、家にもってきた。世帯Xが、近隣住民と食べ物や食材の交換をおこなっていたのに対し、一方、世帯Y、Zは、同じC地区に居住するが、近隣の他民族との食材の貸し借りや「おすそ分け」はまったくみられなかった。その代わり、ムスリムの近隣住民に食に関して不快な思いをさせないよう、慎重な行動がいくつかみられた。例えば、近所の世帯Yの母親は、月に1度、近隣女性約30名とおこなう無尽講に参加している。毎月当番の者が軽食を用意するが、他の人々が自身で調理した軽食を提供する一方、このバタック人女性は、購入したスナックを購入した箱に入れたまま持ち込む。彼女は、「ムスリムの人々は豚肉を調理した鍋で作った料理でさえ、食べるのを嫌がる場合があるから、購入したものは箱ごともっていく。そうすれば購入したものだ」と証明でき、皆が安心して食べられるから」という。彼女が特にこのことに気を遣うのは、彼女がこの隣組に暮らす唯一のバタック人世帯だということに関係する。

また、C地区のバタック人集住地区ではない近隣の市場の豚肉店は1軒のみで、他の肉屋とは離れた場所にある。さらに他の肉屋が商品を店頭並べているのに対し、この豚肉屋はその外観からは何を販売している店かわからず、商品はビニールシートで覆われ、常連客が来た際のみ取り出している様子が見受けられる。

このように、現在の民族ごとの住み分けは土地所有問題と宗教差別による人々の移住・転居の経緯に大きく影響していることが明らかになった。また、バタック人が大多数を占める地域に居住するバタック人と、周囲を他民族、他宗教者に囲まれたなかで生活するバタック人とでは、食や宗教に対する周囲への配慮が大いに異なることが明らかになった。日常生活において友好的関係を築いている人々だが、民族境界線は日常生活の何気ない場面で時折表出する。普段の生活においてはあまり浮き彫りにされないが、食をとおして境界線が浮き彫りになる場面が多いことが明らかになった。

留学の感想:

今回、長期にわたるフィールドワークの機会を与えていただいた私は、「疑問に感じたことは何でも調べてみよう」と思いで調査を始め、ホームステイをすることを決めました。以前、2010年5月から10月の5ヶ月間おこなった調査では、アパートに下宿しながら調査をすすめました。そのため、家庭内の様子や近所づきあいなどの詳細な人間関係に関するデータがあまり入手できず、地域の全体像が把握しづらいという問題がありました。その反省を生かし、本調査では両親（ともに30代）、上は20歳から下は3歳までの5人姉弟と、ハトコの8人家族のX家族に主にお世話になりました。交渉の結果、1年半5畳ほどの部屋を3人の女の子達と同室にて寝泊りをさせてもらえることになりました。1階に2部屋と浴室、2階に1部屋という小さな住居のため、家族の会話や来客の様子が逐一分かることは、私の調査にとって好都合でした。

調査は一筋縄には進まず、はじめは、聞き取り調査に行っても歓迎されないことがしばしばありました。そんな私と調査地の人々との関係構築に一役買ったのが、近所の子もたち数人とゲーム感覚で始めた道端での日本語の授業でした。この授業は、次第に20名ほどの子どもたちがノートとペンをもって、公民館や誰かの家に集まるまでになり、さらに近所の教会からも子どもたちに日本語と英語を教えてほしいとの要望をうけるようになりました。週に2回、賛美歌や童謡をインドネシア語、日本語、英語で歌う授業が始めると、子どもたちだけでなく、大人たちも気軽に話しかけてくれ、聞き取り調査に積極的に協力してくれるようになった。はじめは、「調査に来たのにこんなことをしていていいのだろうか」と不安になりましたが、この授業をきっかけに広がったネットワークが新たな人脈や調査につながっていくのを感じ、関係構築はフィールドワークの仕事の半分だということをも身をもって学び、長期調査をおこなうことの意味をも身をもって理解しました。

調査中は、何気ない世間話のなかに有力な情報が含まれていることもあり、急いでメモをとりました。歴史的資料が少ない本調査地の頼みの綱は住民のオーラルヒストリーでした。居住年数が30年以上の高齢者やその家族に向きあい、移住当初の様子をかかれから聞く作業が続きました。すると、意外な人物との親族関係や移住当初の苦労話がたくさん聞かれ、無数の点が線で結ばれ、地域全体と個人の歴史が合致しながらみえていく感覚を体験し、心が弾みました。

しかし、留学中は楽しいことばかりではありませんでした。ホストシスター3人とルームシェアする生活に時にストレスを感じたり、予定していたことの半分もできなかった日には焦りを感じたり、熱帯夜の寝苦しさや執拗な蚊に悩まされ眠れなかつたりもしました。フィールドノートを読み返すとそのときの私の感情がびっしり綴られています。しかし、今はそれらすべての経験が懐かしく、私を受け入れてくれたホストファミリーはじめ調査地の方々が恋しくてたまりません。見ず知らずの外国人を家に泊め、地域の歴史、文化や慣習、家庭の経済状況、人生観などさまざまなことを教えてくれた調査地の人々に心から感謝しています。

最後に、今回留学の機会を与えていただいた貴財団に心より御礼申し上げます。貴財団のご支援がなければ、長期にわたる充実した研究をおこなう機会は得られなかったと思います。また、研究だけでなく、自分自身と向き合うための貴重な経験をさせていただきました。今回の経験をとおして学んだことを必ず将来の仕事に活かして参りたく存じます。本当にありがとうございました。



写真1: バタック人集住地区の夜の様子。誰からともなく、道路に椅子を持ち出し、歓談をはじめ。そのうち、キーボードやギターを持ち出し、老若男女が歌い、踊る。その歌声が夜の街に心地よく響く。



写真2: さまざまな民族が居住する町内会での月に1度の会合の様子。話し合いの他に、無尽講もおこなう。前月に掛金をもらった者がその月の軽食を用意する。バタック人住民もハラルフードを用意し、他教徒を気遣う。



写真3: 月に1度ひらかれる同郷会の無尽講。
10代～30代の未婚者の会。揃いのユニフォームを作った記念の1枚。クリスマスを祝ったり、旅行に行ったりして交流を深めている。筆者は前列左から2番目。